随　想

海べの鳴く虫

日浦　勇

9月の20・21日と，なかまの車で和歌山市から泉南の海ぞいを直翅類をさがしてまわった。バッタ・キリギリス・コオロギのたぐいには，亜熱帯から暖帯南部型の分布をするものが多い。このあたりが北限の棲息地となる種類がかなりあると思われるからである。

加太深山（かだみやま）のちょっとした谷筋には，夜になるとイヌビワやウメの葉の上におびただしいヒメクダマキモドキが姿を見せ，ふりしきる雨の中を手に手に懐中電灯をもって集った7人の虫きちがいたちをいたく満足させた。今のところ，ここが本州の最北の産地である。ところが大阪府に入ると，この虫がいそうな気配がしない。谷はほこりっぽい。乾きすぎている。クチキコオロギも同様で，深山（みやま）の日吉神社のウバメガシには，枯れた樹皮を二三枚もめくれば見つかるのに，大阪府の天然記念物に指定されている小島のウバメガシ林では，台所の害虫クロゴキブリがとびだしてきただけだった。

二里ケ浜もゴミの原だ。聞きなれぬ透明な鳴声の主を求めてポリ袋や発泡スチロールの山をかきわけていると，防波堤の上から土地の婆さんが汚いから止めろと忠告してくれた。でも，クマスズムシやイソカネタタキがゴミの間からみつかった。このイソカネタタキは岬町豊国崎まで見られた。

大阪湾岸を北上するにつれて，気温はおそらく下がり，乾燥の度はおそらく増すのだろう。和歌山にくらべて大阪府に入ると途端にあれこれの南方系直翅類が姿を消すのは，そうした自然的条件の傾斜が原因なのだろうか。それとも人間による汚染や破壊のひどさが原因なのか。分布調査の折，いつも出くわす問題にこの日も出あったことであった。

新　刊　紹　介

失われゆく大地—地球に迫る生態学的危機—

E.P.エックホルム（Eckholm），石 弘之・水野憲一訳　　蒼樹書房　　pp.274

無限の有機物（食糧生産）を保障する大洋を含めた大地が，森林破壊，過剰放牧，砂漠の拡大，土壌の侵食，かんがい施設への土砂の堆積，魚類の乱獲などによって，破壊されている事実を，世界各国の事例を示しながら解説したもの。食糧危機からの環境破壊へのとりくみで，環境問題がともすれば先進工業国における化学物質の乱用による大気・水の汚染とされているが，それらにくらべて，発展途上国で広がりつづける砂漠，不毛化する大地，増大する洪水，土壌侵食といった環境の破壊の方が，ずっとさし迫った大きな問題である。アフリカやインドの自然が敗走している現実にくらべれば，東京のスモッグ退治など，ほんの小ぜりあいであるとさえ述べている。そんな単純な比較はできないのであろうが，グローバルな見方からすれば，やはり，この食糧危機，その裏にある自然環境の変化は直視しなければならないようである。

著者のE．P．エックホルム氏は現在，ワールドウォッチ研究所員。1949年生まれという若さであるが，1972年，ストックホルムで開かれた国連人間環境会議に提出された報告書など，多くの論文・データー（参考文献が約600つけられている）に基づいて書かれたものだけに説得力がある。

副題が「地球に迫る生態学的危機」とされているが，これは元の「環境破壊と世界の食糧の見通し」の方が，やはり内容をよく表わしていよう。生態学的危機という言葉が，少し浮いているような感じがする。（渡辺弘之）

自然保護教育のこころみ—野外研20年の足跡—

東京教育大学野外研究同好会

自費出版　　pp.223

昭和32年に結成され，今では伝説のようになっている東京教育大学野外研究同好会（通称野外研）の活動の記録である。同会は，東京教育大の廃校にともなって昭和53年3月で解散となった。野外研は結成の目的として自然の観察・研究・保護と啓蒙活動をあげ，多彩な活動をくりひろげ，大町山岳博物館と共に「山の自然科学教室」（昭和32年～昭和40年），東京都高尾自然科学博物